トルコからのたより ②

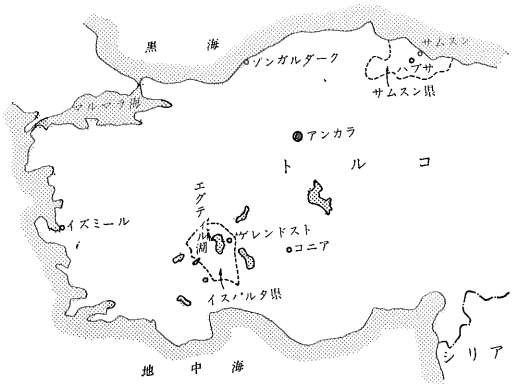
井上英二

第5信　ゲレンドストより

私は9月14日よりイスパルタ（Isparta）県のゲレンドスト（Gelendost）にきています．　人口5,000人足らずの小さな村　ここはまたブルドルと同じく湖の多い所でトロス(Toros) 山脈の西に当ります．　アンカラからいえば　真南へ250km のコンヤ（Konya)から　さらに西へ180 kmエグリデイル(Egridir) 湖のほとりです．

ゲレンドストの地質

ここは前におしらせしたブルドルと同じように第三紀鮮新世の凝灰岩とトラバーチンが　白亜系の石灰岩や蛇紋岩をおおっています．　褐炭はその凹部に少しあるばかり　厚さも0.5～2m位です．　こうしたお粗末な鉱床でも　村人は掘るのに一生懸命です．　見たとこでは基盤の中には堆積型鉄鉱床やクローム鉱床が著しいように思われました．　またもやいっしょのベディング博士に「MTA はどうして　こんなところばかり調査するのか　イズミールにあるような厚さ数10m の褐炭層やゾンガルダーク（Zonguldak）の石炭をしらべないのか」　とききますと　「町村の自給自足の要望があるからだ」　ということでした．　一説には数年前からドイツの大会社が　MTA の後援でこの国に入っており　彼等が重要な炭田を調べているとのことです．　ドイツとトルコとは以前からの友邦で　ドイツの進出は伝統的であるとさえ思えます．　アンカラからコンヤまで　トルコ随一の大平原を突走って来ました．　そこは準平原ともいうべき所で　平坦に堆積した鮮新世の地層が分布し　遠くに月面の火口を思わせる火山が列をなしてながめられます．



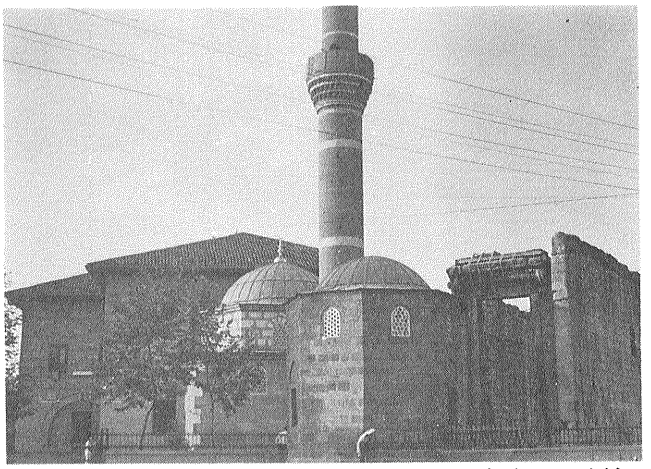
調査位置図

この荒漠とした平原はもし水さえあったら　すばらしい緑野にかわることでしょう．　数年前ダムを作ったそうですが　基盤が石灰岩なので水がたまらず　全然ダメだったようです．

農村に暮す

イスパルタ県に入るとボツボツ地中海型の風景がみられます．　木の緑が山肌にみえ　この数日　ここゲレンドストは降ったり止んだりの天候です．　雨が降れば息をつく思い　しみじみ雨のよさを感じます．　気温も東京の10月初めのようで　それというのもこの土地が標高1000mに近い台地となっでいるからです．　このゲレンドストは肉屋はおろか　バターさえ売っていない田舎ですし山羊の肉は臭くて口に入りません．　野菜は毎週金曜日に村の広場で盛大に開かれるバサールで買います．ブドー・トマト・馬鈴薯・玉ねぎが主で　メロンと西瓜は少なくなりました．　宿は純トルコ風の農家の2階をかりていますが　床は泥　天井は芦でおおったゴザです．このゴザが曲者で夜になると体長5mm（本当ですよ)の巨大な南京虫が　ここからベッドに襲来します　最初の2～3日はカユくて眠れずついに D.D.T. を使い少しは安眠できるようになりました．　日ごとに顔をあわせる村人のうち　男は汚れた背広に10人が10人ともハンチングをかぶり　女は原色花模様のモンペと上衣それにスカーフをすっぽりとかぶっています．

朝から男たちは茶店でダベり　働くのは女性だけ　しかしイスラムの習慣とか　われわれを大歓迎してくれます．　先日私はベ博士の代理で　ある部落へあいさつにゆきました　ジープから降りると老若男（女はなし）に取り巻かれホッシュ　ゲルディニス（Wellcome）　といって握手を求められ　南京虫を気にしながらその手を握るというわけです．　こちらがトルコ語で答えたが最後あとはペラペラとなり　私はある時はボーゼンと　また



①ハズ・ブイラム（モスクとアウグスタスの神殿）（アンカラ市内）

ある時はニヤニヤするばかりです．　こういう時はカメラが実に有効な外交手段となります　うつして上げれば先方も喜び私も記録がとれますから．

部落長の家に招じ入れられると　トルコ・コーヒーとタバコをすすめられ　私の地下足袋をみていくらかと聞き　あるときはおかしげに笑われます．

「どこからきたのか」「ジャポン」というとうなずきわかるのですが．　日露戦争時代の日本を知っている人はほとんどなく　朝鮮戦争に従軍した人はさすが日本がなつかしそうです．　こうした農村でみる人々は筋肉質のからだ　ごつい手　そして日焼けした顔　これこそ純粋のトルコ人と感じました．　現在のトルコをリードしているのは　欧州系の血が混っている人々が多いようです．

いたるところギリシァ・ローマ時代の大理石の彫刻がありモスクの壁石　臼　泉の敷石になったりしています．茶店の椅子にもたれてジュズをまさぐる男たちなど宗教に対する彼らの敬けんさは　バチ当りの私などおよぶところではありません．

憩いの一時

日曜には水浴とセンタクをかねて近くのエグリディル湖へ行きます，　皆ハダカでジープを洗い　石けんでからだをあらい泳いで一服．

この湖の背後には標高2500～2600mの石灰岩の岩山がそびえ　湖畔にはモスクとローマ時代のお城をもった赤尾根の村がながめられます．　この砂浜は緑黄色を呈する重鉱物（多分 Olivine と思う）からなっていました．

時としては村から村へ旅をつづける　トルコ熊（北海道のヒグマ位）をつれた芸人が歩いて来ます　金をやると熊が立って芸をする　何となく物悲しい情景でした．

親切な村人ともなれ子供たちがあいさつしてゆきます．　このあたりでは私が最初のジャポンだからかもしれません．　といってもしばしばトルコ人の間に「ヤバンジン」というささやきを聞きました．　まさか日本語でシャベルわけもあるまいとは思っても気になっていたのですが　トルコ語で Yaban（ヤバン）は粗野のいみでちょうど日本人が昔　外人のことを「イテキ」「ナンバンジン」といって軽べつしたのと同じようで　外国人は皆「ヤバンジン」ですから安心しました．　やがて9月も終りになります．　今夜は放送で大きな台風が日本をおそい250人死んだということを聞きました．

（9月25日　ゲレンドストにて）

第6信　再びハブサへ

私は10月のはじめ　ゲレンドストからアンカラへ帰りました　1カ月ぶりの入浴　肉もたらふくたべて生気をとりもどしましたが　調査で多少疲れもしました．

しかしその後1カ月たち　10月下旬より今度は北の黒海沿岸サムスン（Samsun）県のハブサ（Havza）に来ております．　調査は私の他に運転手人一です．　ハブサは黒海沿岸から80km ばかり入った　人口1万たらずの町です．　この町は食堂もたくさんあり　食物も豊富なので自炊にも困らず　前回の南京虫攻勢にすっかりこりて　一番よいアパートに泊っております．

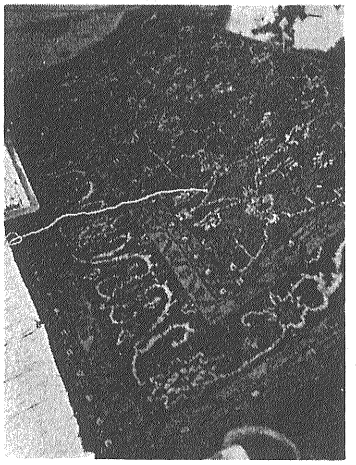
黒海の秋

ハブサは北緯41°　北海道の函館位に当っています．

気候は東京の11月頃と同じで　夜と朝は肌寒く　日中は20～30℃あります．　10月末県庁所在地のサムスン（人口15万）にゆきましたが　黒海からの海風で湿気が多く　ちょうど故国日本の空気を思い出しました．　満月が照りかがやく黒海のかなたには　ソ連があると思えば　はるばる来たものだと感慨無量でした．

運転手が黒海の水はからくないというので　ナメてみましたらそれほどからくありません．　翌朝みる黒海は何の変りもないのですが　トルコ語では黒海を　Kara

②トルコ南西部の典型的農家（ゲレンドスト）



③製作中のトルコじゅうたん
すべて手織り　これは5人でおる

Deniz（黒い海） 地中海を Ak Deniz（白い海） といっています． 塩分その他の要因による透明度のちがいではないかと思っています． 10月末まで好天であったこの土地も11月に入りますと 2～3日強い風が吹きあれたあとは降ったり止んだりの天候となりました． トルコの雨季（12月～3月）がやって来たのです． 朝は濃霧が立ちこめジープを走らせるのに苦労します． 山に登ってながめると北方の黒海から大黒雲が迫力をもって押しよせているのですが 内陸は晴． しかしこの黒雲はやがてトルコ全土をおおうことでしょう．

黒海の沿岸といえば何となく陰さんな自然を想像しがちですが 来てみると山々には木々の緑あり 谷川には水ありで 内陸の砂漠のような景観とは対象的です．

農家も何となく豊からしく 山は今 白樺が黄色に紅葉してみごとです． 見通しがきかないためここでは日本流にテクテク歩く調査をやっております．

今 当地はマンダリン（日本のミカン） 柿や栗が出まわりホーレンソーばかりたべています． 当地の米はアンカラ米と異なり はるかにおいしく粘りがあり，外米といった感じがしません． みやげのバナナがこの秋にも出回っているのもちょっと解せないことです．

調査の敵

ハブサにおける地質調査では 1/25000 の地形図で 含炭地の地質をしらべておりますが 当地には3つの小炭鉱があります． その1つは炭丈3m以上 鮮新世の炭層で60人ばかりで掘っており 運搬はロバと人力 カンテラ下げて全く原始的なものです 他のものは白亜系か第三紀始新世の石炭で 5000カロリー位 炭丈は1mです．坑内から上るとさっそく坑口前の広場で紅茶と食事です．トルコ人は朝から晩までタップリ砂糖の入った紅茶をたしなみますが ちょうど日本人の茶をのむのと同じですね． こうした坑内調査のほか 野外を歩くとき私の恐怖のマトは羊の群の番犬です． 変な人間（私）をみるとキバをむき出して猛然とおそってくるそのスサマジさまさにかみ殺されるのではないかと思うほどです． 幸い人夫がピッケルをふり上げ 石を投げ抵抗するので今のところ事なきをえています．

ジープで通りますと四方から追いすがりほえ立て 恐しいやら腹立たしいやらです． こうした番犬ときたらノドを目がけて とびかかってくるので危険この上なしです． 何しろ当地一帯に多い狼に対抗するため 首には長いトゲのある鉄の首輪をはめ 斗うように仕込まれた犬なので 私にいわせれば野獣に近いと思います．大きさは土佐犬ぐらい． それでも狼にはこの犬4～5匹かかってようやく互角とのこと 狼の大きさは人夫にいわせれば私位だというのですが これはあてにはなりません． それで私たちは村の中を通るのをやめ 羊の群をみると遠く迂回するようになりました．

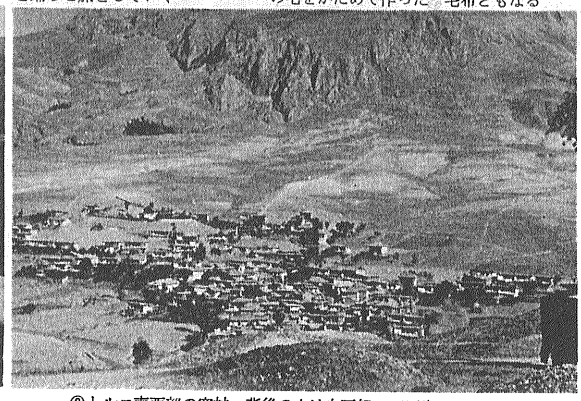
以下57頁へつづく

④トルコ南部の典型的な村人たち
最前列中央 部落長（ゲレンドスト）

⑤熊と旅芸人 太鼓をたたいて
ヒグマを踊らせ旅をしていく

⑥牧童と羊と山羊の群 牧童のマントは羊
の毛をかためて作った 毛布ともなる

⑦ジープの行手をはばむ牛馬の群 フィールドではしばしば
このように立往生



⑧トルコ南西部の寒村＿背後の山は白亜紀の石灰岩
手前は Pliocene の地層